

独立行政法人 農業技術研究機構

果樹研究所ニュース

National Institute of Fruit Tree Science

2002. 3



カンキツ「はるみの樹勢」と「果実」

「100%」への消費者の期待	2
皮接ぎを利用したカンキツ台木の樹勢調節機能の 早期評価法	3
みかん新品種 'はれひめ'	4
果樹研究所公開シンポジウム	5
園芸試験場百周年を記念し、果樹・野菜・ 花分野で6月に行事	5
南ブラジルでのリンゴ及びニホンナシの技術協力を終えて ..	6

〈トピックス〉

つくば科学フェスティバルに参加	8
技術交流 in つくば 2002	8
つくばテクノロジーショーケース	8
カンキツ研究部興津一般公開	9
リンゴ研究部一般公開	9
ブドウ・カキ研究部一般公開	10
表彰・受賞	10

〈掲示板〉

人事異動・研修・海外出張・依頼研究員	11
--------------------------	----



巻頭言

「100%」への消費者の期待

企画調整部長 駒村 研三

古くから、家族が揃って食事をしくつろぐ場は、囲炉裏端、そしてこたつや食卓に変わっても、みかんやりんごなどのくだものが、急須や茶碗などとともに、そこには欠かせない物で、季節や豊かさを感じる貴重な存在であった。しかし、家族構成や生活スタイル、家構造の変化につれ、家族が揃ってテーブルを囲むことも減り、果物も生果実が減りジュースやゼリー、サラダ、菓子やケーキなどでも喉を通るようになった。さらに、近年は、スナック菓子や加工甘味食品とともに、各種清涼飲料の増加が著しい。

わが国の市販飲料の消費は、外国産オレンジジュースの進出に続くコーラや人工着色炭酸飲料などの大氾濫に至るが、今日、合成甘味・着色料への忌避もあり、乳酸菌飲料、低カロリー飲料、より天然素材や必要成分付加やイオンバランス飲料などが広く普及している。現在、コンビニや自販機などに並ぶ多彩な飲料も、コーヒー・茶系や乳酸飲料を除くと、少なからず果実・果汁が原料として使われている。

近年の果汁飲料生産は、一時期の減少から1998年以降増加傾向に転じているが、100%果汁は原料輸入自由化による価格低下で一時期増加したものの、その後微減が続き、55万klと果汁飲料220万klの25%程度で、主には果汁入り清涼飲料の増加によっている。それも、最近では茶系飲料の急速な伸び(400万kl以上)に押されている。

15～35歳の若年層2625名を対象にした果汁飲料の需要意識調査(2001.3中央果実基金協会)によると、各種飲料で購入・消費の多いのは、茶系、100%果汁、コーヒー系が群を抜き、男性はコーヒー派が多いが、茶と100%果汁はやや女性が多い。100%果汁の消費量を100とすると、10～100%未満果汁飲料は65、果汁系ニアウォーターは61、果汁・野菜混合飲料は58であり、

野菜飲料は44、機能性栄養・健康飲料は28と少なくなる。

消費者は、76%が健康を考え飲料を選択し、気にする項目では、カロリー(60%)、糖分量(49%)、ビタミン・ミネラル量(32%)、栄養素等の表示(32%)、合成保存・着色料(29%)などで、カロリーと糖分は健康優先層と味覚嗜好優先層のいずれでも高いが、味覚優先では、ビタミンやカロリー、着色料への関心はやや低い。果汁についての嗜好では、73%の人は100%果汁が好きで、次いで野菜果汁混合飲料47%、30%果汁37%、果汁系機能性ニアウォーター36%、果汁系ニアウォーター25%である。

100%果汁に対しては栄養素や機能性成分が豊富、健康・美容によいとのイメージを80%近く、果汁野菜混合飲料では90%が持っており、また100%果汁は40%の人、野菜果汁混合飲料は30%以上の人によく飲まれている。一方、果汁系ニアウォーターは健康美容に良いとは思わず(61%)、栄養素や機能性成分が豊富とは思わない(65%)が、喉が渴いたときに飲みたい(55%)飲料と認識され、特に15～19歳層では、野菜果汁混合飲料は顕著に低いのにに対して、30%果汁とともに高く好まれている。また、これら果汁系飲料に対しては、カロリー・栄養分の表示(89%)、自販機への100%果汁の配列(87%)、農薬残留など安全情報の表示(83%)、果実機能性成分の表示(79%)などが強く要望されている。

このように、「100%」は消費者の健康安全への志向などに応える重要な要素であり、生果への期待にも通じるものである。生果実の消費拡大においても、健康への寄与などの積極性の具体的表示・伝達や年齢層を意識した情報を果実とともに提供すること、さらにより新鮮さの保証やカット、スライス、ジュースなどの1次加工技術、利活用法等の開発など、消費者を見据えた官、民、生産、流通の連携強化が必要である。

くだもの展示館② -柑橘-



楊枝入、胡椒入&鉛筆削り、マグネット(上下とも)、針刺

研究の紹介

皮接ぎを利用したカンキツ台木の樹勢調節機能の早期評価法

カンキツ研究部 栽培生理研究室 緒方 達志

果樹は樹勢が強くて樹が大きくなり過ぎると管理作業が大変であるし、樹勢が弱くて樹が小さすぎると収量があがりにくい。このため、適切な樹勢に保つことが非常に重要である。しかし、品種によっては肥培管理だけで樹勢を調整するのが困難な場合もある。その場合、適切な台木に接ぎ木することで樹勢を制御できれば非常に好都合である。だが、新しい台木を選抜するには長期間、大面積を要し、効率が悪い。もし台木樹勢の早期評価法があれば効率を上げられる。

そこで着目したのが、台勝ち、台負けである。カンキツ類は台木により台勝ちおよび台負けという現象がみられる。台勝ちとは接ぎ木部で穂木の部分よりも台木の方が太くなって幹に段差ができる現象であり、台負けはその逆の現象である(図1、2)。カンキツ台木の樹勢との相関が高く、わい性台樹ほど台勝ちとなり、強勢台樹ほど台負けが強くなるという関係がある。このため、樹勢の早期評価に利用できる可能性がある。

そこで、通常の接ぎ木(切り接ぎ)の代わりに、3~5cm幅で樹皮を剥ぎ取り、そこに別の品種の樹皮を接ぎ木して(皮

接ぎ 図3、4)、太さがほとんど同じ状態にしてみたところ、6カ月もすると台勝ち台負けと同様の太さに顕著な差が現れた(図5、6)。すなわち、この方法により台木の樹勢を早期に評価することが可能である。この方法は、実生が1本あれば利用可能であるため早い段階で評価可能であるうえ、管理方法によるばらつきがほとんどないため特に利用価値が高いと考えている。

ただ、残念ながらこの方法も万能ではなく、キンカンとシングルシトルメロにはあてはまらないことを確認している。しかし、これ以外の台木品種には非常に良く適合しており、早期評価法としては十分利用できるであろう。

なぜこのような肥大の差が生じるのかについては今のところ不明である。台勝ち、台負けのような接ぎ木部の段差は養分の移行阻害でも生じるが、図5、6のように皮接ぎ部分だけ太さが異なっているのは別の原因と考えられる。幹の肥大にはエチレンなどの植物生長調節物質が関与するが詳細なメカニズムは不明であるため、枝の肥大メカニズム解明への利用など植物生理学的にも利用できる興味深い現象である。



図1 わい性台木の台勝ち現象



図2 強勢台木の台負け現象



図5 強勢台木のラフレモンに半わい性台木のカラタチを皮接ぎしたもの



図6 半わい性台木のカラタチに強勢台木のラフレモンを皮接ぎしたもの



図3 皮接ぎ状況1
幹に3cm幅で傷をつけ樹皮をはがす



図4 皮接ぎ状況2
別の品種から同様に剥いだ皮を取りつけ、テープで固定する。約1週間で活着する。

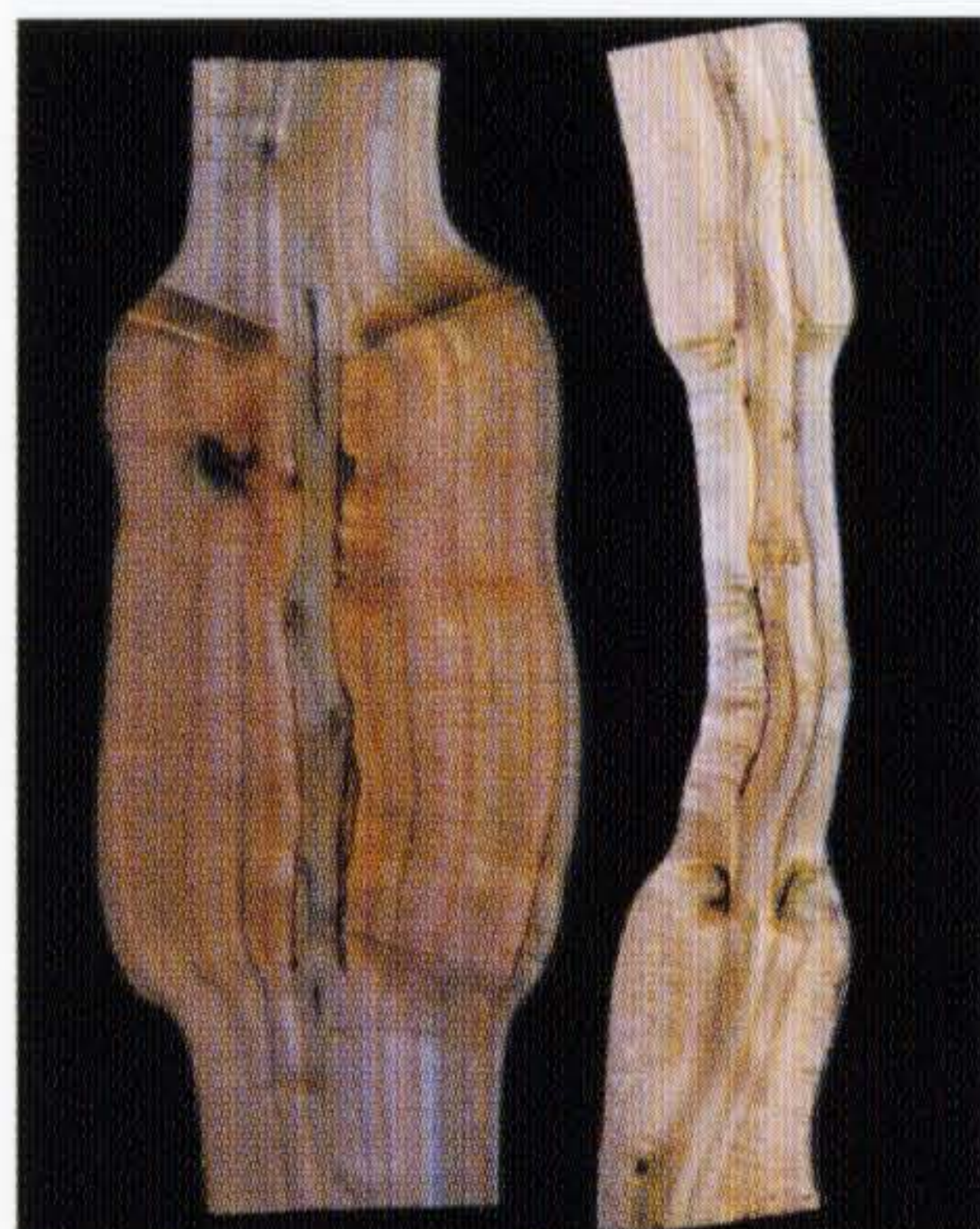


図7 皮接ぎ部の断面図
皮接ぎ部の中心に細くみえる組織は皮接ぎ部の上下の品種と同じだが、その両側は皮接ぎした品種由来の組織

研究の紹介

早熟で食べやすいみかん新品种 ‘はれひめ’

カンキツ研究部 素材開発研究室 吉田 俊雄

育成経過

早熟で食味が良く、剥皮が容易でじょうのう膜が薄く、また、種子が少なくて食べやすい新品种の育成を目標とした。1990年5月に果樹試験場興津支場(現果樹研究所カンキツ研究部興津)において、‘E-647’ (‘清見’ × ‘オセオラ’) に‘宮川早生’を交雑して育成した品種である。1992年4月に高接ぎを行い、着花、結実の促進を図った。個体番号は「K-220」である。1995年に初結実し、果実調査の結果、優良個体として一次選抜した。1996年4月よりカンキツ第8回系統適応性・特性検定試験に「カンキツ興津54号」として供試し、地域適応性を検討した。その結果、食味が良く、食べやすい優良系統であることが認められ、2001年10月9日付けで‘はれひめ’と命名、「みかん農林14号」として登録された。現在、種苗法に基づく品種登録を申請中である。

特性の概要

樹勢は中庸で、樹姿は直立性と開張性の中間である。枝梢は太く、短く、密生する。節間の長さは中位である。葉は小さく、細長い形をしている。花は小さく、単生する。葯は退化し、花粉は無く、‘清見’タイプの雄性不稔である。花柱は‘清見’のように湾曲している。結実性は良好である。そうか病にはかなり強く、かいよう病にはやや罹病性である。

果実は平均180g内外で、果形指数130位の扁球形である。果頂部、果梗部の形はともに平らである。果皮は橙色で、果面はやや滑らかである。油胞は中程度の大きさで、凹んでおり、その分布は密である。果皮の厚さは4mm内外で、みかんタイプとしてはやや厚いが、柔らかく、剥皮は容易である。浮き皮はほとんど発生せず、発生しても軽度である。果皮の

完全着色は12月上旬～中旬である。果心は大きく、空洞となる。果肉は橙色で比較的柔らかく、果汁量が多い方である。じょうのう膜は比較的薄く柔らかいので食べやすい。す上がりの発生はほとんどない。果汁の糖度は10%内外で比較的低い。減酸が早く、12月上旬には0.7%程度になり、オレンジ様の風味があり食味は良好である。成熟期は12月上旬で、普通温州程度に早熟であり、年内の収穫、出荷が可能である。花粉が無いので他品種の花粉がかかれば無核である。自然受粉でも含核数は少ない。種子は単胚性である。

栽培上の留意点及び適応地域

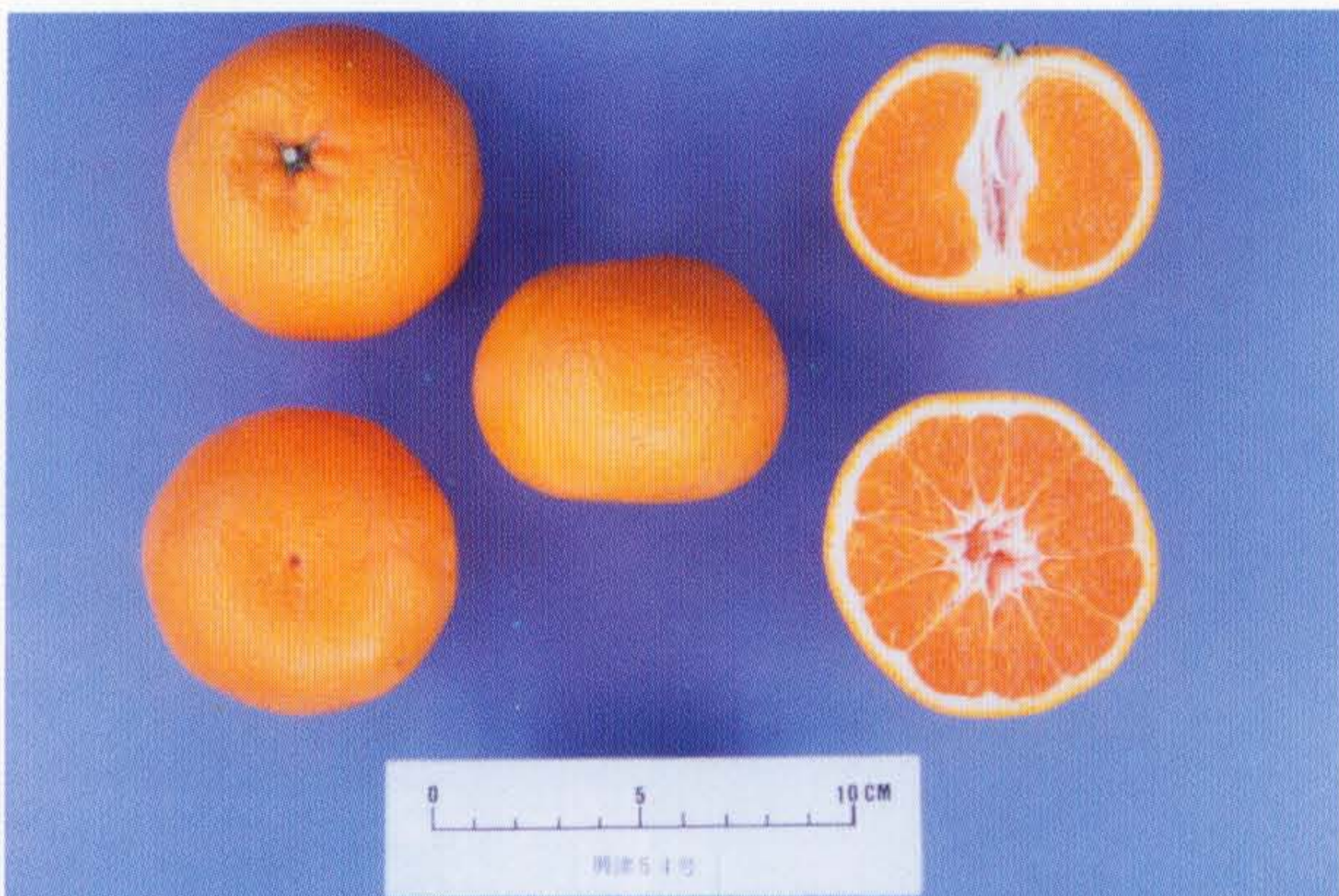
成熟期が12月上旬で早熟性であり、カンキツ栽培地帯では果実への寒害の恐れはないので、栽培可能な地域は広い。しかし、栽培条件により果汁の糖度が比較的低く、食味が淡白になりやすいので、品質の良い果実を生産するためには、夏秋季に降雨が少ない地域での栽培や土壌水分をコントロールしやすい栽培様式での栽培が望ましい。瀬戸内地域等で普及が見込まれる。収穫期が同時期の普通温州は生産過剰傾向にあるので、本品種が新しいタイプのカンキツとして一部置き換わって普及することが期待される。

命名の由来

品種名は「晴姫」の意味で、夏秋季に晴天が続くことで甘く香り高い果実となることを表現した。

育成者

吉田俊雄、根角博久、吉岡照高、中野睦子、伊藤祐司、村瀬昭治、瀧下文孝



第1回

果樹研究所公開シンポジウム 「果物から健康へのアプローチ」

開催後記

果樹研究所となって初めての公開シンポジウムを 財団法人 中央果実生産出荷安定基金協会との共催で平成14年1月24日に農林水産省農林水産技術会議事務局筑波事務所つくば農林ホールにて開催しました。このシンポジウムでは、近年の日本人の食生活の様々な問題点を改善するため、平成13年度にスタートした「毎日くだもの200グラム」運動に連動して、食生活における果物摂取の意義や食生活のあり方について一般の理解を深め、ひいては果実の消費拡大を目的としました。

当日は、公立試験研究機関果樹研究者等の果樹専門家ばかりでなく、消費者、青果小売店、流通関係者、医療従事者等、多くの一般参加者の参加を得て、約450名の参加となりました。当日参加の一般の方からは、内容が難しかった、質問ができる雰囲気ではなかった、等課題も寄せられましたが、次回も是非参加したい等、評価する意見が多く寄せられました。今後の課題としては、交通の便が良い市中心部での開催、休日の開催、マスコミを通じた宣伝等があげられました。次回のシンポジウムをどのような課題でいつ頃開催するかはまだ未定ですが、なるべく一般の方にも参加いただける内容で平均年1回の開催を計画していきたいと思えます。



園芸試験場百周年を記念し、果樹・野菜・花分野で6月に行事

明治36年6月に農事試験場園芸部が静岡県興津町に設立され、国レベルでの組織的な園芸研究が開始されて本年で100年を迎えます。その後、農事試験場園芸部は園芸試験場、さらには果樹試験場、野菜試験場などの幾たびかの組織の再編と拡充を経て、今日の果樹研究所、野菜茶業研究所、花き研究所、及び東北農研野菜花き部と九州沖縄農研野菜花き研究部に受け継がれていますが、この間、新品種の育成や技術開発など試験研究の遂行とともに、技術者、農業後継者の養成として、8,000名近い見習生、養成研修生を全国に送り出し、わが国の園芸産業の発展を技術面のみならず人的にも支え、食生活のみならず、健康や文化創造を担う園芸分野の発展に貢献してきました。

100周年記念事業は、こうした関係者を組織する桜会などの協力も得て計画され、6月20日の東京・虎ノ門パストラルでの「園芸試験場百周年記念式典」・祝賀会を始め、その前後には、発足の地である興津、平塚、つくば、津・安濃、久留米、口之津で記念事業がとりおこなわれ、さらに盛岡、安芸津では、秋の公開日に企画しています。また、記念誌や100年の歩み映像CD-ROM、桜会名簿などの作成作業を行っています。

これを機に、わが国の果樹をはじめ園芸産業とその産物が、国内外の厳しい競争にうち勝ち、新鮮で高品質、安全で安心、そして健康と潤いをもたらすものとして、消費者に喜ばれ需要拡大にも貢献できるよう期待しつつ、全所的に取り組んでいます。 (駒村研三)

南ブラジルでのリンゴ及びニホンナシの技術協力を終えて

前国際協力事業団南ブラジル小規模園芸研究計画リーダー

柳瀬 春夫

花は咲かず、芽がとんで葉も少ない、まるで枯れ樹のような樹、Bud abortion(芽ぼけ)と呼ばれる発芽障害である(写真1)。

2001/2002年生育シーズン、サンタカタリーナ州にある農牧研究普及公社(Epagri)カサドル試験場のニホンナシ園はこれまでに経験したことがない異常気象の影響を受けた。ブラジルの研究者はこの地域の気候を温帯気候としているが、亜熱帯地域の高原地帯の気候であり、日本にはないさまざまな地域特有の気候条件による栽培上の問題がある。

私共がかかわったブラジルでのリンゴとニホンナシに関する技術協力は1996年12月にスタートし、5年計画で昨年11月に終了した。リンゴについては、本プロジェクト以前の個別専門家派遣を含め25年間技術協力が続けられたが、ブラジルにおけるこれまでの技術協力を振り返ってみたい。



写真1 ニホンナシ(品種：二十世紀)の芽ぼけの状況

アテ・アマニャン(Ate amanhã)の世界

ブラジルの街はあまり約束にはこだわらない。明日連絡すると言われ待っていても先ず連絡は来ず、電話すると理由をつけてまた明日までとなる。悪いとは思っていないらしく、Aquie Brasil(ここはブラジルだから)と言い、気にしていない。もともとアテ・アマニャンとは「じゃ、明日また!」あるいは「さようなら」と言う別れ際の挨拶である。ブラジルのことを誰が名付けたか「アテ・アマニャンの国」と言う。スケジュール通りきちっと物事を運ぶことにはこだわらず、いろいろな行事も期日が迫ってこないと準備に力が入らないらしく、これで間に合うのかと心配になるが、当日にはちゃんと準備が整う。また、行事は時間通り始まったことはない。最初は戸惑ったが、慣れてくるとこちらも気楽になりストレスは少なくなる。

難しいニホンナシの芽(花)ぼけ対策

芽(花)ぼけの被害は大きく、第二次大戦前にブラジルに導入されたニホンナシ栽培が根付かなかったのもこの障害による。芽(花)ぼけには、晩秋に気温が下がらず休眠していない芽がその後の低温で障害を受ける場合と、冬でも20℃を超える日が続くことがあり、冬季の低温不足とその後の低温で芽が障害を受ける場合がある。また、品種の温度反応にも違いがあり、‘二十世紀’、‘豊水’、‘幸水’の中では‘二十世紀’が最も芽(花)ぼけを起こしやすく、‘幸水’は3品種の中では少ない。被害軽減策として‘二十世紀’から比較的作りやすい‘豊水’への更新、さらに人工授粉の実行により安定収穫が確保できるようになった。しかし、今シーズンのような異常気象の下では、いずれの品種も花芽は枯死し、試験園では花は咲かなかった。ただ、類似する気象条件下で、花芽が生き残り、ある程度の収穫が期待できそうな園地もあり、今後、異常気象条件下でも最低限の収穫を確保するための、樹齢、仕立て法、微気象条件などさらに検討していくべき課題は多い。

重要な病害抵抗性品種の育種・選抜

メインサイトのあるサンジョアキン高原地帯のため、真夏でも平均気温が17℃前後と冷涼で、驟雨が毎日のようにある。効果の高い殺菌剤があっても黒星病の多発に悩まされ

る。また、‘ふじ’とともにブラジルのリンゴ品種を2分する‘ガラ’では近年発生するようになったガラ斑点病が多発し、被害が増大してきている。年間の薬剤散布は20～30回に及ぶ。プロジェクトではこうしたことから抵抗性品種の育成に取り組んできており、野生種の黒星病抵抗性遺伝子を交配により取り込んで育成した晩生品種‘カタリーナ’、‘ガラ’と晩生品種‘ふじ’の間を埋める中生系統で同様の方法で育成したF27P5を選抜してきている。‘カタリーナ’はPRを兼ねてスーパーマーケットで開いた試食即売会でのアンケート調査でも消費者からは好評を得て、現在、徐々に栽培面積が増加している。

また、ガラ斑点病の抵抗性遺伝様式は単因子支配で、罹病性が優勢で、‘ガラ’の斑点病罹病性は優勢な感受性遺伝子を1個保持していることによることが判明した。このことから、 γ 線照射による突然変異誘起で抵抗性個体の作出を目指し試験を進めている。

わが国には発生しない種類の病害虫

ガラ斑点病の病原菌は *Colletotrichum gloeosporioides*、*C. acutatum*、*Colletotrichum* sp.であることが明らかになり、前2種はいずれもリンゴ炭そ病の病原菌として知られているが、ガラ斑点病を起こす分離菌株は炭そ病を起こさず、病原性の異なる系統であると考えられた。本病はブラジル以外では発生は認められていない。本病のリンゴ園での発病好適条件が明らかにされ、発生予察に向けたデータの積み重ねが行われている。

害虫ではリンゴ・ニホンナシともミバエによる被害が大きい。20種以上のミバエがいるが、90%近くがミナミアメリカミバエである。リンゴではトラップによる成虫の密度低減対策や殺虫剤散布により被害を食い止めることが可能であるが、ニホンナシはリンゴ以上に被害が顕著で、周辺に寄主植物の多い自然林のあるところでは袋掛けなしでは栽培は難しい。なお、ブラジルでは必要以上に同じ薬剤を散布して、リサージェンスによるダニの多発を招き、また、ごま色斑点病を黒斑病と見誤って余分な薬剤を散布し、年間の散布回数が20回程度に上っていた。これらは指導により9回程度まで下げることが出来、回数削減によって、リサージェンスによるダニの多発もなくなった。

発展したリンゴ産業とこれからのニホンナシ栽培

ブラジルのリンゴ生産量はこの5年間でほぼ倍増し、100万トン近い生産量を上げるまでになり、国内需要を満たすようになった。生産量は2001年には前年の結果過多で落ち込んだが、2002年には回復すると見られている。ヘクタール当りの生産量も増加し、日系農業組合の例では平均40トンを超えている。リンゴ栽培に関する日本の技術協力は30年にわたる。ブラジルのリンゴ産業の発展、特に小規模農家の所得向上に大きな貢献をした。ブラジルでも農業に携わる日系移民の間で後継者の農業離れが問題になっているが、サンジョアキンのリンゴ栽培農家では高い所得を得ており、若い多くの後継者がリンゴ栽培を行っている。

一方、ニホンナシについては栽培技術の指導により生産は安定し、また、高値で取引されることから、ニホンナシの栽培を始めるブラジル人も増加し、ブラジル人の生産者数は日系生産者を上回るほどになった。今後、ニホンナシの栽培が順調に伸びていくかどうかは、栽培技術の確立・普及指導とともに、今シーズンのような異常気象の起きる頻度が大きな要因になると考えられ、これを克服する対策の確立が課題である。帰国前の昨秋開催した温帯果樹セミナーはブラジルの国・州政府関係者ととともに、多くの研究者、そして生産者が参加し、大盛況であった(写真2)。日系移民にはブラジルでのニホンナシ栽培にかける強い執念が感じられる。



写真2 プロジェクト主催で開かれた温帯果樹セミナー

つくば科学フェステバルに参加

平成13年10月6～7日の両日、つくばカピオで、つくば科学フェステバル2001が開催されました。当研究所では、「果物で電気をおこそう」のテーマで参加し、果物を電池にしてオルゴールを聴いたり、発光ダイオードの光を見たりして、子供達に大変好評を得ました。



技術交流 in つくば 2002 で発表

平成14年1月25～26日につくば国際会議場「エポカルつくば」において、技術交流、研究交流、技術移転等の推進を図ることを目的にメインテーマ「長生きを楽しむために」のもと「技術交流 in つくば 2002」が開催されました。当研究所からは生理機能部の田中敬一室長が「ヒトボランティア介入研究によるリンゴの健康増進効果の解明」と題して発表し、好評を得ました。



つくばテクノロジーショーケースで発表

つくばサイエンスアカデミーは研究者相互、企業相互、研究者・企業・行政の個別交流を促進すると同時に、ベンチャー事業の契機となる場づくりを狙った「つくばテクノロジーショーケース」を平成14年1月29日につくば国際会議場エポカルつくばで開催されました。当研究所からは生産環境部の大津善弘室長が「カンキツ周縁キメラの効率的作出法」、生理機能部の杉浦俊彦研究職員が「比重を利用した果実糖度の非破壊推定装置」の研究成果を発表しました。なかでも92件の発表の中で大津善弘室長は優秀プレゼンテーション賞を受賞されました。



トピックス

カンキツ研究部興津 一般公開

ウスカンザクラがちょうど見頃となった2月9日(土)に、カンキツ研究部興津が一般に公開されました。小春日和にさそわれて、約5500人がキャンパスを訪れ、独法化最初の公開日を楽しみました。

本年度の公開は、コンセプトを「100周年」に設定してイベントを企画しました。なかでも、100年を振り返るCDショーは、出色でした。記念アルバムやビデオから再編集した20分ほどのストーリーで、映像や音声を伝えられないのが残念ですが、あまりの出来栄の良さに「ナレーションが入れば…」の声がし



きりでした。今回、初めて試みた圃場ガイドツアーでは研修生が大活躍で、30分のコースを虎の巻を片手に、銘木のいわれ、カンキツの管理や研修生活など、無事に案内の大役を果たしました。試食会では、パートさんたちが手を腫らしながらミカンを切り分け、新品種の説明に声を潤らしました。研究展示会場では、インターネットサーフィンを企画したほか、豪快な品種展示で目を引き、健康や果樹栽培の相談にも「手応えあり」でした。そして、来る6月に向けて、100周年記念公開講演会の宣伝も怠りなくの、とにかく忙しい1日でした。



リンゴ研究部 一般公開

独立行政法人になって初めての一般公開でしたが、開催日が日曜日から土曜日に変更となり、10月13日に開催しました。今まで共催であった隣接の野菜茶業試験場盛岡が東北農業センターに入り、今年からは隣接の施設で実施されなくなりました。また、昨年まで同日開催の岩手牧場のモーモーフェスティバルと実施日が異なったこと、一般公開の数日から天候が不順で小雨が降ることが多かったことから、来所者数がどうなるか見当が付きませんでした。最終的に1,306名のたくさんの方に来所いただきました。なお森林総合研究所東北支所とは例年通り、東北農業研究センターとは久々に同日開催でした。3ヶ月前から実行委員会が発足したこともあり、各担当の委員方々の企画が

随所で発揮され、総じて素晴らしい一般公開となりました。最新の研究成果の実物展示やパネル展示、リンゴ研究部育成品種を含む種々のリンゴ展示と試食、各研究部から送付いただいた数々の果樹の展示、丸ごとリンゴの漬け物を含むリンゴ料理、新品種のさんたろうなどのリンゴジュース、リンゴ圃場探検ツアー(昔と今のリンゴの味の違いは?)、リンゴ創作生け花、手作りリース、あぶり出し、リンゴ皮むき、リンゴ名前当てゲームなどのイベントも盛りだくさんで、多数の方々に来年度も是非来たいというご意見や、職員の説明が一生懸命でリンゴのことをよく知って欲しいという気持ちが良く伝わってきたというご意見を多くいただき嬉しい限りでした。



トピックス

ブドウ・カキ研究部 一般公開

ブドウ・カキ研究部では地元広島県安芸津町で毎年行われている「火とグルメの祭典ーあきつフェスティバル」に合わせ、フェスティバルメイン会場への出店(土・日曜)と、研究部の施設公開(日曜)の2本立てで一般公開を行っています。今回は10月27・28日の開催でした。メイン会場で行った「果物クイズ」には、抽選でカキやキウイが当たることもあり、初日だけで1000名以上の参加者という大盛況ぶり。クイズでは当研究部育成の赤色でおいしいブドウ「安芸クイーン」と、大粒で甘くサックリ感が新しいカキ「太秋」をPR。これら品種の収穫時期ではないため味わっていただけないのが残念でしたが、町外からの来場者も多く、研究所と新品種の知名度アップが期待できそうです。研究部の施設公開では相談コーナーが人気で、カキの肥培管理法や渋ぬき法などの質問が次から次。カキの高接ぎ

実演コーナーや果物試食コーナーも盛況でした。日曜はあいにくの雨で来場者数は昨年よりやや少なかったものの、熱心な参観者の方々が雨の中、果物畑案内ツアーの説明に聞き入っておられました。



◆表彰・受賞

日本 DNA 多型学会優秀研究賞(2001.11)

「SSR マーカーを用いたナシの親子鑑定と親の推定」

木村鉄也、澤村 豊、小曾納雅則、正田守幸、斎藤寿広、
壽 和夫、林 建樹、伴 義之、山本俊哉

我々は種苗管理センターと共同で、信頼性が非常に高いSSRと呼ばれるDNAマーカーを、ナシで世界に先駆けて開発してきました。SSRマーカーを使ってナシの親子の判定を行い、いくつかの品種の親子関係の間違いを明らかにし、さらに本来の親の推定が可能なことを明らかにしてきました。日本DNA多型学会は、DNAマーカーによるヒトの親子関係や犯罪捜査など、法医学の権威ある学会であり我々の研究レベルがヒトの研究に匹敵すると認められたことを誇りに思っております。今後は、果樹で問題になっている異名同種、同名異種、枝変わり品種の判定など、より高度な品種識別場面での利用が期待されます。

